『海』第二十七号の作品について

『海』のホームページには、「ニュース」のコラムを設け、『海』の作品に対していただいた批評や感想などの内容の要旨を掲載し、同人個々の参考になるようにしています。

第二十七号（通巻第九十四号）の作品に対しお寄せいただいた感想などの一部（抄）を、左記に掲載させていただきます。

ご意見をいただいた各位（お名前は略）に、心から感謝申し上げます。

◇織坂幸治追悼小特集の部

・改めて織坂氏の凄さと、功績の大きさを知った。寂しい限りである。

・織坂氏の作品は――日本人としての社会批判、反抗精神のいずれも健全だと思う。

◇エッセイの部

有森信二「福岡文芸教室の頃」（東野追悼）

・東野氏の「平和を希求してやまない」という姿勢に感銘した。

◇詩の部

群　青「資本主義の終わりなのかぼくの終わりなのかⅡ」

・ことばにちからがあり、声に出して読んでみた。

◇俳句の部

松本西夏「風のうしろ」

・秋風や風のうしろにだれもいぬ　ほか二句がよい。

◇小説の部

神宮吉昌「黄色い朝」

・唇のできものの治療のことが、的確にその過程をおって描かれている。

・快癒までを冷静に描いた姿勢がよい。

・心に残る作品である。

高岡啓次郎「真凜の世界」

・友人の女性から頼まれ、理由の判らないまま旅行をする。

・途上での心理の描き方がうまく、起承転結もしっかりしており、惹きつけられた。

川村道行「コンパクトタウン」

・時代の問題提起としての舞台設定がよい。

・実験的な作品にチャレンジしていた作者の死を知り、残念である。

牧草　泉「玲子の孤独」

・騒音の中で孤独を感じやすい、という表現が面白い。

・在日五世の帰化について語られるが、その辛さが理解できる。

有森信二「タイム・スクリーンへの誘い」

・最近実験手法的な作品が多い。経過を見させてもらいたい。

・読めなかった。分からなかった。

・読者のことを、よく考えるべき。

・難解ではあったが、楽しく読めた。

井本元義「聖なる川」

・虚無の世界に圧倒された。心理描写がすばらしい。

・淡々と短文で綴られていくが、構成がよく、引き込まれていく。

・利一とリサの場面は、恋愛小説の傑作。

・闇の中に流れていく川は、すべてを流し、消していく。

◇『海』全体の部

・この号も読み応えのある作品が多く、充実している。

・現在の不自由な時期に、キチンと持続するという志に敬意を表する。

（まとめ・U）